

神奈川における縄文時代文化の変遷 V

中期中葉期 勝坂式土器文化期の様相 その 3

－文化的様相－

縄文時代研究プロジェクトチーム

I. はじめに

平成9年度から開始した中期中葉期・勝坂式土器文化期の様相をめぐる研究の3年次目にあたる平成11年度は、前年度に行った勝坂式土器編年案の成果をもとづいて、その文化的様相を探る研究活動を行った。該期は縄文文化が最盛期を迎え、各地に大規模な拠点の集落である環状集落が形成され始める時期に相当する。以下、検出された各種遺構・集落構造および遺物の特性について触れることとする。 (山本暉久)

II. 遺構

1. 竪穴住居址

本プロジェクトで集成し得た該期の竪穴住居址は1439軒を数える。このうち、報告書等の事実記載・挿図から概要が比較的明らかとなっている81遺跡735軒の竪穴住居址を対象とし、平面形態・長軸規模・炉址形態・支柱穴数・壁下構造・拡張(建替)・付帯施設という7項目の属性についてデータ化を行い、各時期毎の傾向を抽出することを試みた。尚、各竪穴住居址の時期比定は報告書等の記載によるものであるが、詳細な時期に言及していないものに関しては、昨年度提示した編年案(I～VI期)に従って行った。

①時期別の軒数(第2図)

時期別の軒数は、I・II期が21遺跡31軒、III・IV期が32遺跡146軒、V・VI期が55遺跡325軒となっており、遺跡数・住居数とも右肩上がりに増加していることが分かる。同時に、1遺跡の平均住居数が増加傾向(I・II期;1.5軒→III・IV期;4.6軒→V・VI期;5.9軒)にあることにも着目しておきたい。

②分布(第3図上段左)

集成し得た735軒の住居の分布を水系別に集計した。勝坂式期全体を通してみると、多摩川・鶴見川水系に31遺跡185軒(25.2%)、相模川水系に27遺跡445軒(60.5%)が認められ、該期集落の立地・分布において、かかる水系周辺エリアが県東部と県央部の核となる地域であることが分かる。

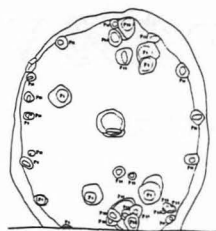
③平面形態(第3図上段右)

平面形態が把握できたものは735軒中491軒であった。グラフからも分かるように、各形態の比率は時期による際だった特徴を示すものではないが、定形的な形態(円形基調・方形基調・多角形)を示しているもの(479軒)のみで比較すると、時期が新しくなるにつれ、方形・多角形の形態を採る住居の比率が高まる傾向(方形;19.2%→22.1%→23.9%/多角形;0%→2.3%→2.9%)にあることが看取される。

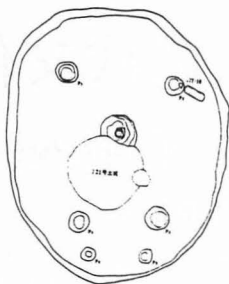
④長軸規模(第3図中段左)

第3図のグラフは、長軸規模を3段階(2m以上4m未満/4m以上6m未満/6m以上)に区分し、各領域に属する軒数を集計・図化したものである。このうち、長軸規模の数値化が可能であった459軒を対象に時期別の推移をみてみると、概ね中規模と見なした4m以上6m未満の住居の比率は各時期を通して65%前後で一定

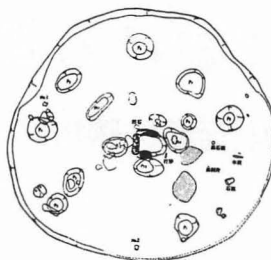
I・II期



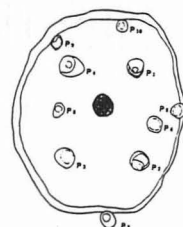
三ヶ木 1 住



川尻 3 住

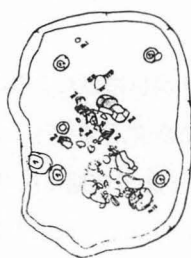


当麻 73 住

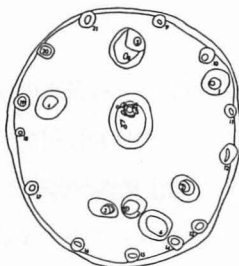


笹峰 1 住

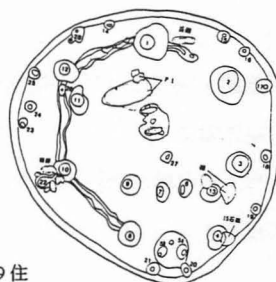
III・IV期



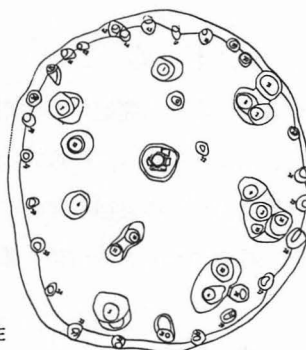
当麻 3 住



下原A 19 住

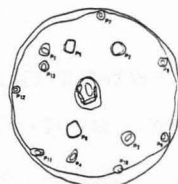


下中丸B 2 住

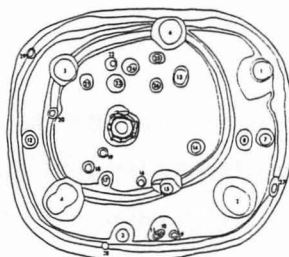


下原A 4 住

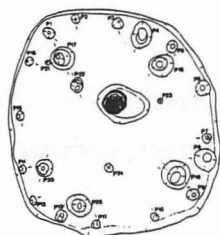
V・VI期



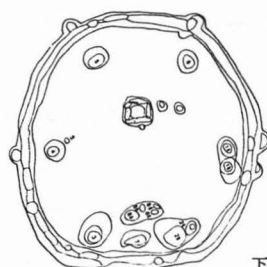
大地開戸 12 住



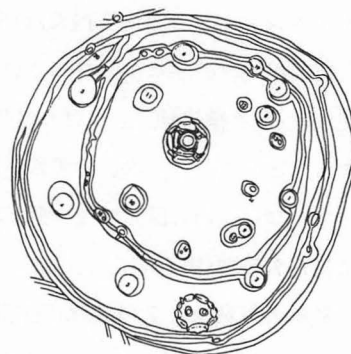
下原B 15 住



SFC II区 2 住

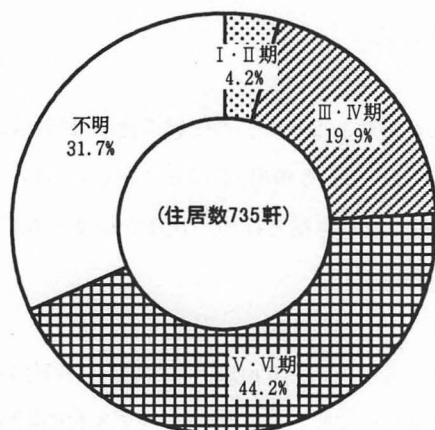


下中丸B 1 住



下原B 27 住

第1図 勝坂式期の竪穴住居址 (S=1/150)



第2図 勝坂式期竪穴住居址の時期別の比率①

第1表 勝坂式期竪穴住居址の時期別の軒数 (付帯施設・拡張等)

	入口施設			その他の施設			拡張等	
	張出部	ヒット	張出部+ヒット	埋塞	石囲遺構	壁外ヒット	拡張	建替
I・II	0	1	0	0	0	1	2	4
III・IV	0	4	3	0	0	0	17	35
V・VI	1	18	2	5	3	1	109	57
不明	1	1	0	2?	0	0	61	9
合計	2	24	5	7?	3	2	189	105

の比率を占めているが、概ね小規模と見なした2 m以上4 m未満の住居の比率は減少傾向(27.3%→25%→11.3%)に、概ね大規模とみなした6 m以上の住居の比率は増加傾向(9.1%→10.7%→23%)にある。

⑤炉址形態(第3図中段右)

炉址形態を地床・埋甕(土器片囲む)・石囲(石置含む)・石囲埋甕(石置埋甕含む)・炉無しに分類し、各類型毎に集計した。形態が把握された住居は634軒存在する。Ⅰ・Ⅱ期においては埋甕炉を付す住居の高い比率(51.7%)が目をつく。埋甕炉を付す住居15軒中7軒で阿玉台式土器の伴出が認められ、うち5軒では炉体土器として使用されていた。埋甕炉成立の背景として、東関東からの影響は看過できない要素と言えるかもしれない。Ⅲ・Ⅳ期においては地床炉(29.4%)・埋甕炉(29.4%)・石囲炉(21.4%)を付す住居が率的に拮抗する。また、炉無し・石囲埋甕炉に関しては、確実なものが該期より散見される。前時期からの増加率を形態別にみると、石囲炉を付す住居が5.7倍で唯一住居全体の増加率(4.7倍)を上回り、飛躍的に施設率が高まる。Ⅴ・Ⅵ期の様相は、地床炉と石囲炉の順位が逆転する他は前時期と大きな変動はない。前時期からの増加率は、埋甕炉(2.7倍)・石囲炉(2.7倍)・石囲埋甕炉(4倍)を付す住居が住居全体の増加率(2.2倍)を上回る。全時期を通してみると、石囲炉・石囲埋甕炉という縁石を伴う形態の炉址の伸び率が際だっており、ピークとなるⅤ・Ⅵ期の比率は併せて全体の40%を超える。中期後半期へ引き継がれる傾向のひとつとしてとらえておきたい。

⑥支柱穴数(第3図下段左)

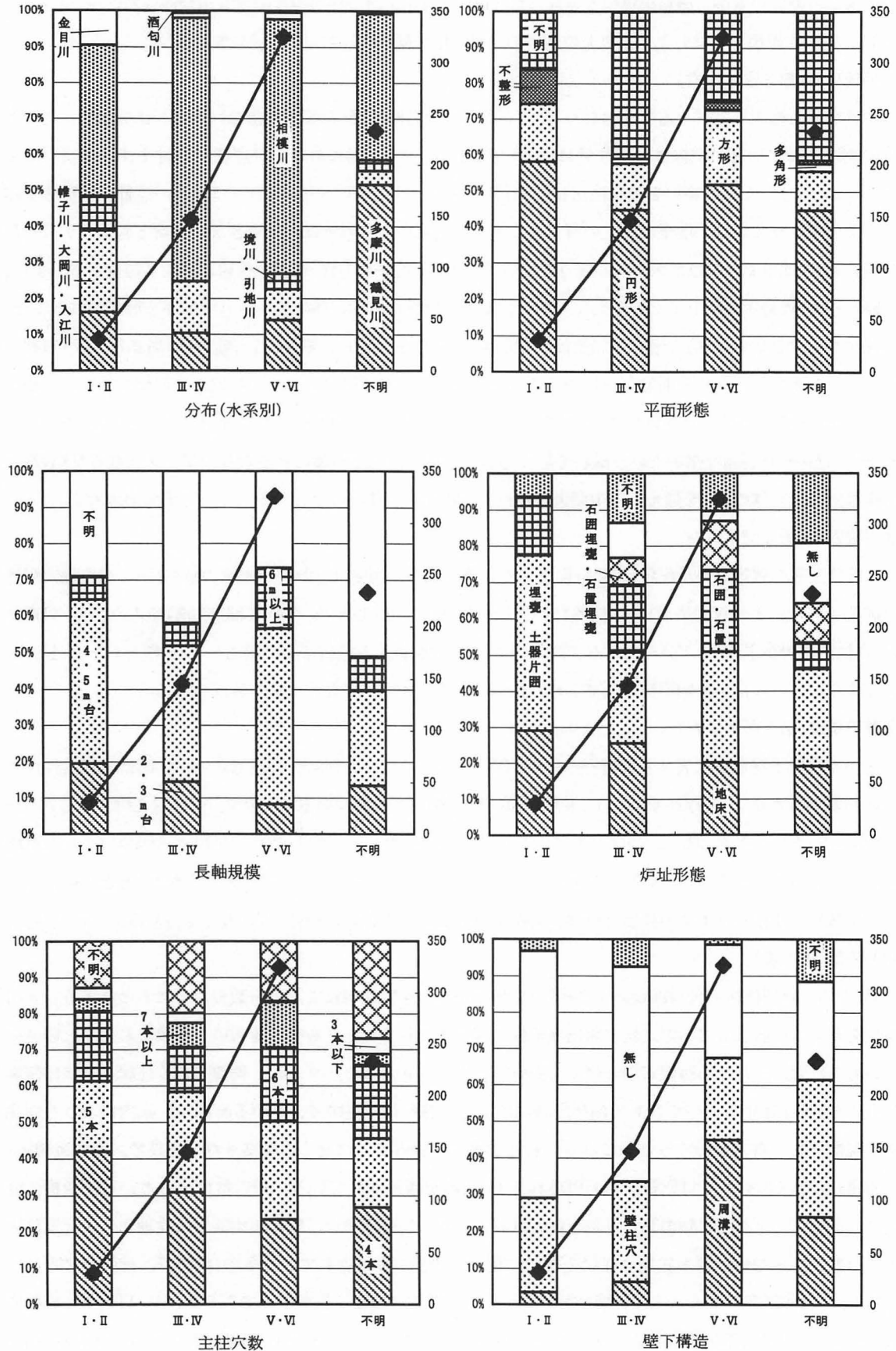
支柱穴配置を確定し得た住居は585軒存在する。集成した範囲では、0・2～8本柱の8パターンの支柱穴配置が確認された。Ⅰ～Ⅳ期においては4本柱の住居が主体(Ⅰ・Ⅱ期;48.1%/Ⅲ・Ⅳ期;38.5%)を占め、Ⅴ・Ⅵ期では5本柱の住居が主体(32.1%)を占める。7本以上の支柱穴を有する住居は漸次増加しⅤ・Ⅵ期でピーク(15.1%)に達するが、これは、長軸規模の項でふれた住居の大形化傾向と連動している側面もあろう。

⑦壁下構造(第3図下段右)

住居の周壁下構造を代表する周溝・壁柱穴の有無について、その判別が可能であった住居は691軒(住居の最終形態でのカウント)存在する。Ⅰ・Ⅱ期では、壁下構造をもたないものが70%、壁柱穴を付すものが26.7%、周溝を付すものが0.3%と、極端な偏在性を示す。Ⅲ・Ⅳ期では、周溝・壁柱穴を付す住居のいずれも微増するが、全体的な比率はⅠ・Ⅱ期と大差がない。Ⅴ・Ⅵ期では、周溝を付す住居の比率が45.6%と激増することが特徴で、壁柱穴タイプの住居と併せ、周壁下構造を有する住居が全体の7割近くを占めるようになる。

⑧その他(第1表)

第1表は、該期住居の付帯施設および建替・拡張等の状況を時期毎にまとめ軒数表示したものである。入口施設を有する住居として、竪穴状の張出部や梯子穴と思われるピットを有するものを対象としたが、確度の高いものに限定したため勝坂式期全体でも31軒をカウントするにとどまった。埋甕を伴う住居は、ほぼ確実なものが5軒存在する。いずれもⅥ期新段階に属すると思われる住居で、かかる時期が、県内における埋甕の初現期として有力であろうと思われる。石囲遺構は住居内の入口近くに構築される施設で、上中丸遺跡・下原遺跡B地区においてⅥ期新段階と思われるもの3軒が報告されている。報告書によると、石囲遺構の性格は、埋甕または祭壇に類似した施設と推察されている。現時点では、相模川中流域に立地する上記遺跡以外での類例をみない。勝坂式期の住居全体で、柱等の建替が実施されているものは105軒、拡張がなされているものは189軒存在する。Ⅰ～Ⅳ期における住居の再構築は建替住居が主体であるが、Ⅴ・Ⅵ期では拡張住居が飛躍的に増加(前時期比6.4倍)する。住居規模が大形化する傾向にあるⅤ・Ⅵ期においては、建替・拡張等なんらかの再構築が実施されている住居は325軒中166軒を数え、全体の過半数におよんでいる。(井辺一徳)



第3図 勝坂式期竪穴住居址の時期別の比率② (分布・平面形・規模・炉址・主柱穴・壁下構造)

2. その他の遺構

当該期の竪穴住居址以外の遺構としては竪穴状遺構、掘立柱建物址、集石、土坑、屋外埋設土器がある。

竪穴状遺構(第4図1)

竪穴状遺構として報告されたものが笹峰遺跡に1基、土橋第六天遺跡に2基、大地開戸遺跡に1基ある。平面形は円形ないし不整円形、規模は直径約2.5～3.5m程の小形の竪穴で、床面には炉をもたない。ピットはあるものとないものがある。時期は笹峰遺跡例は第Ⅰ期、大地開戸遺跡例は第Ⅲ期、第六天遺跡例は第Ⅴ期に属する。小形の竪穴住居址と報告されたもので炉をもたないものには本遺構と類似したものがある。

掘立柱建物址(第4図2～4)

該期から加曽利E式期にかけての掘立柱建物址は港北ニュータウン内にある前高山遺跡、大熊仲町遺跡、神隠丸山遺跡、小丸遺跡、三の丸遺跡、高山遺跡、寅ヶ谷東遺跡、花見山遺跡の8遺跡で検出されている。このうち前高山遺跡では当該期に限定できる掘立柱建物址が18基検出されたが、18基中には柱穴列が単列のものと複列のものが存在した。前者は短辺柱穴数－長辺柱穴数が2本－3本(同図2)や3本－3本と小形のものからなる一方、後者は小形のもの(同図3)は少なく、長軸長が8mを越える大形のもの(同図4)が多い傾向がある。この柱穴を二重に巡らす大形の掘立柱建物址は石井寛氏がD群掘立柱建物(石井1989)と分類し、当該期を特徴づけるものとしたもので、他にも小丸遺跡や花見山遺跡などで確認されている。この他港北ニュータウン外では大地開戸遺跡で第Ⅰ期に属する掘立柱建物址が1基検出されている。この掘立柱建物址は集落構成のわかる前高山遺跡や神隠丸山遺跡では竪穴住居址群より内側に占地しており、共同作業場や居住施設など多くの見解が示される本遺構の機能を推察する上で興味深い。

集石(第4図7・8)

当該期に限定できる集石は上白根遺跡で1基、湘南藤沢キャンパス内遺跡で9基、下原遺跡で1基、飯山上ノ原遺跡で2基、中坂東遺跡で5基、川尻遺跡で1基、三ヶ木団地内遺跡で3基報告されている。また大熊仲町遺跡や加賀原遺跡などでも勝坂式から加曽利E式にかけての集石の存在が報告されている。平面形は円形や不整円形をなし、規模は小さいものでは径が約0.5m程度、大きいものでは約2.0m程度のものまであるが、径が約1.0～2.0m程度のものが主体である。集石の下部には大抵円形で播り鉢状の土坑が存在する。時期別には第ⅠないしⅡ期に属する中坂東遺跡2号集石(同図8)や、第Ⅲ・Ⅳ期に属する三ヶ木団地内遺跡1・3号集石、第Ⅴ期に湘南藤沢キャンパス内遺跡例や中坂東遺跡1号集石(同図7)などがある。

土坑(第4図9)

該期の土坑は平面形が円形基調を基本とし、不整円形や楕円形のものが存在する。規模は径が約0.4～2.0m程におさまるものが多い。深さが比較的浅く、土器が埋設されている土坑は墓壇と考えられ、墓制の項で触れている。一方それらに該当しないものは貯蔵穴など他の機能が考えられる。

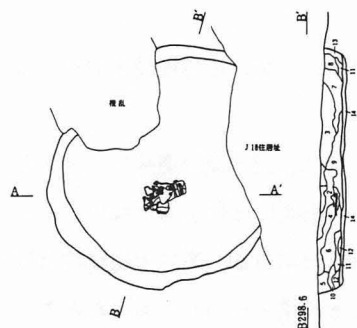
屋外埋設土器(第4図5・6)

当該期の屋外埋設土器は土器が正位に埋設されたものがほとんどである。逆位のものは大抵土坑内に埋設されたもので詳細は墓制の項で触れている。焼土を伴うもの(同図6)と伴わないもの(同図5)があり、前者は炉としての機能が想定できる。

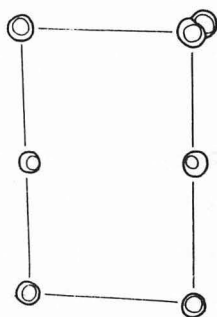
(松田光太郎)

参考文献

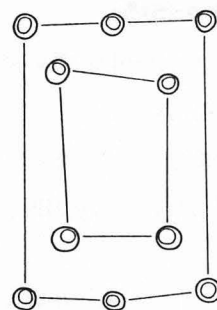
石井寛 1989「縄文集落と掘立柱建物跡」『調査研究集録』6



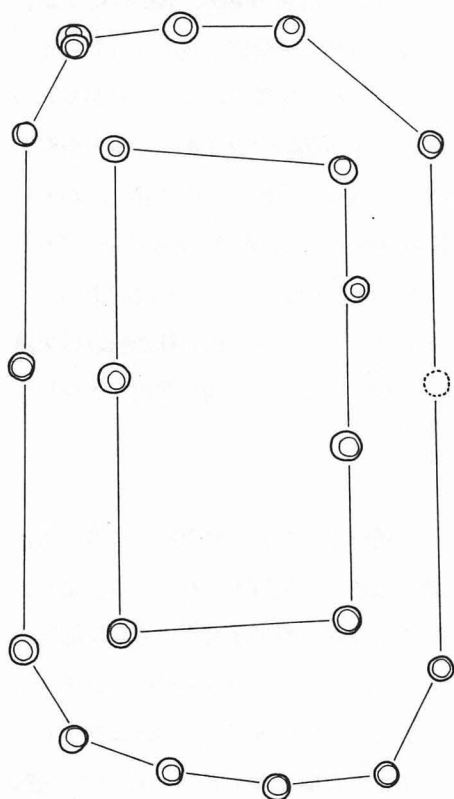
1 大地開戸遺跡 J 1号縦穴状遺構



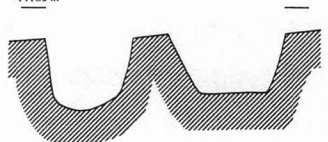
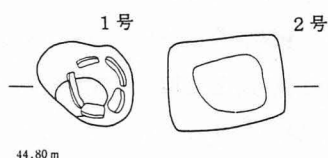
2 前高山遺跡



3 前高山遺跡



4 前高山遺跡

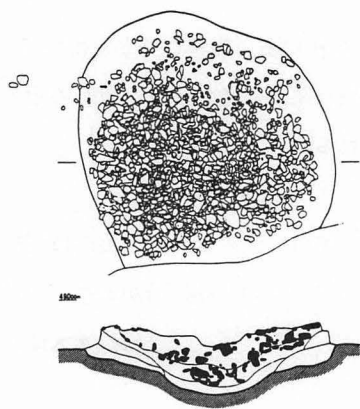


1号

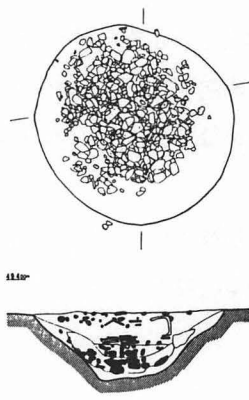
2号

5 受地だいやま遺跡
第1・2号埋設土器

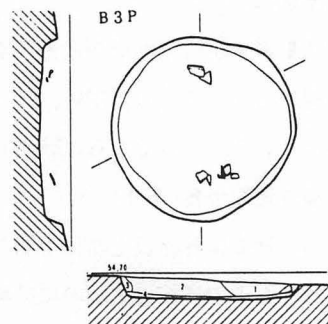
6 長津田遺跡群長月遺跡



7 中板東遺跡 1号集石



8 中板東遺跡 2号集石



9 花見山遺跡 B 3号土坑

第4図 勝坂期の各種遺構

Ⅲ. 集落構造

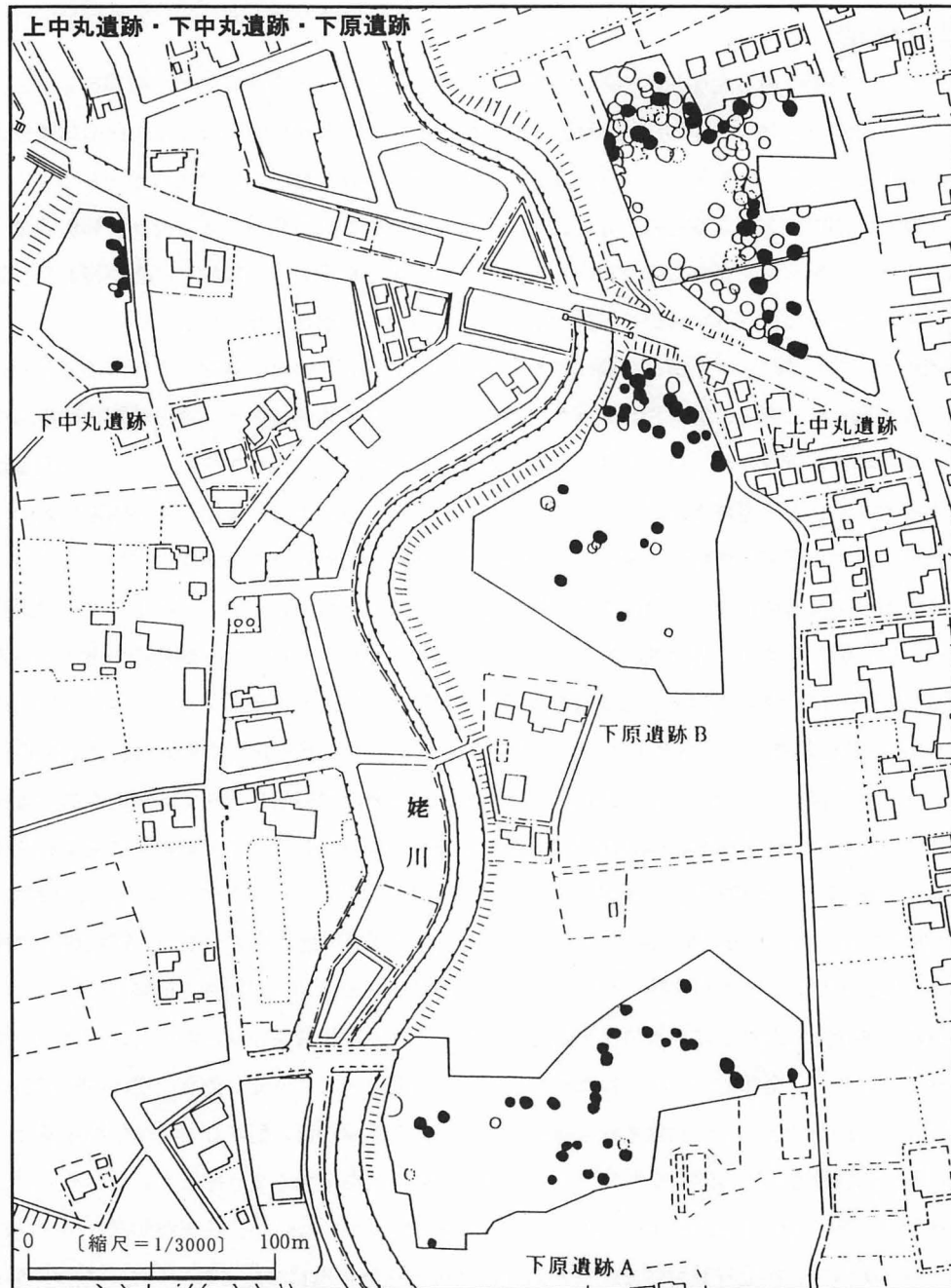
縄文時代中期は集落が最も発達した時期にあたる。神奈川県内における住居跡数の推移を見ると、中期初頭の五領ヶ台式期の住居跡は55基(加藤 1997)であったが、今回の集成で取り扱った中期中葉勝坂式期住居跡は1458基以上を数える。中期後半の加曽利E式・曾利式期にかけてはさらに急激に増加していくものと思われる。中期初頭期では2～3基程度の住居跡のまとまりで構成される集落であったが、勝坂式期では数十基単位のまとまりで集落が営まれるようになる。ここでは、ある程度の平面規模で調査が行われ、集落の構成がほぼ明らかになった代表的な遺跡を概観することにより、その構造を見ていきたい。

上中丸遺跡・下中丸遺跡・下原遺跡で構成される下溝遺跡群(第5図)は、隣接する3つの遺跡で比較的広い面積の調査が行われた例で、加曽利E式期まで継続して営まれる集落である。勝坂式期の遺構は住居跡94基と土坑・集石などが確認されている。勝坂式期を通じた最終的な住居の分布を見ると、下中丸遺跡、上中丸遺跡と下原遺跡B、下原遺跡Aの3つのまとまりが見られる。報告では、集落の古い段階において下原遺跡Aと下原遺跡Bで小単位の集落が出現し、北側の上中丸遺跡と西側の下中丸遺跡に拡散していき、盛期には広場を有する3ヶ所の環状集落に発達すると把握されている(文献76・77・85)。このように下溝遺跡群は、河川を挟む下中丸遺跡も含めた広い地域にわたり集落の広がりが認められることが特徴の遺跡である。

岡田遺跡(第7図)は、勝坂式期から加曽利E式期まで継続して営まれる集落である。勝坂式期の遺構は、住居跡358基と掘立柱建物跡・土坑墓・集石などが確認されている。勝坂式期の集落は、調査区の西側・東側・南側の3ヶ所の環状集落で構成され、新しい時期の住居は集落の内側に分布する傾向があると指摘されている(文献69・82・93)。杉久保遺跡(第6図)は、勝坂式期から加曽利E式期まで継続して営まれる遺跡である。勝坂式期の遺構は、住居跡58基が確認されている。報告では小単位の住居の変遷が捉えられている(文献71)。全体的な分布を見ると台地先端部にあたる北側と台地基部付近の南側の2つの環状集落で構成されている。当麻遺跡・田名花ヶ谷戸遺跡(第6図)は、勝坂式期から加曽利E式期まで継続して営まれる集落である。2遺跡は隣接し、合わせて17基の住居跡で構成されている。集落成立期においては小単位の住居が見られるのみであったが、全体的な分布では環状を呈するよう配置されている。前高山遺跡(第7図)は、勝坂式期の掘立柱建物跡がまとまって発見された遺跡である。掘立柱建物跡の配置など具体的な変遷は明らかではないが、竪穴住居跡と一定の間隔を保ちつつも最終的には環状を呈するよう配置されていることは注目できる。大熊仲町遺跡(第6図)は、住居跡の具体的変遷などは明らかでないが、住居跡50基と掘立柱建物跡5基で構成される集落で、掘立柱建物跡の配置が前高山遺跡と同様に環状に配されている。金程向原遺跡(第6図)、上白根おもて遺跡(第6図)は、調査範囲に制約があり周辺の様相は明らかでないが、環状又はブロック状の集落を呈していると思われる。吉岡遺跡(第7図)は勝坂式期の集落で、調査範囲では4基のみの住居跡で構成され、大規模な集落には発達しないことが想定できる例として取りあげた。

集落の発生期は、編年案の第Ⅰ期及び第Ⅱ期にあたるものは当麻遺跡・田名花ヶ谷戸遺跡などがあげられるが遺跡数は全体的に少ない。編年案の第Ⅲ期・第Ⅳ期に発生期が該当する集落が圧倒的に多い。

集落の継続性は、中期初頭五領ヶ台式期から継続が認められる遺跡は極めて少ない。金程向原遺跡では、地点が少し異なるが北側に隣接する第Ⅱ地点で五領ヶ台式期住居跡が3基発見されている。南側には勝坂式期～加曽利E式期の集落が展開しており、第Ⅱ地点を含めて捉えると勝坂式の前段階から継続して集落が認められる少ない事例である。勝坂式期以降については、加曽利E式期まで継続する集落は多数認められる。

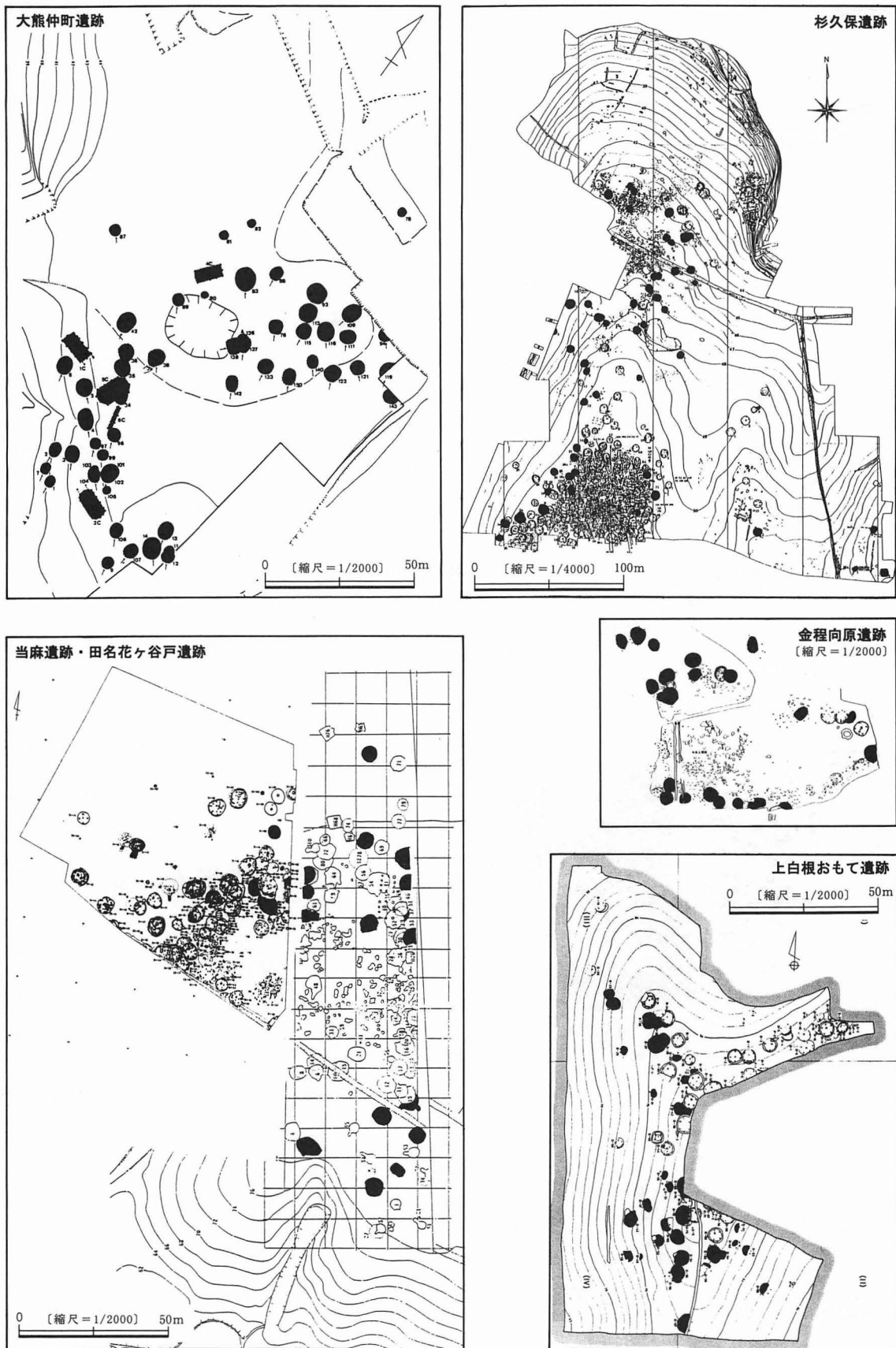


第5図 勝坂式期の主要集落(1)

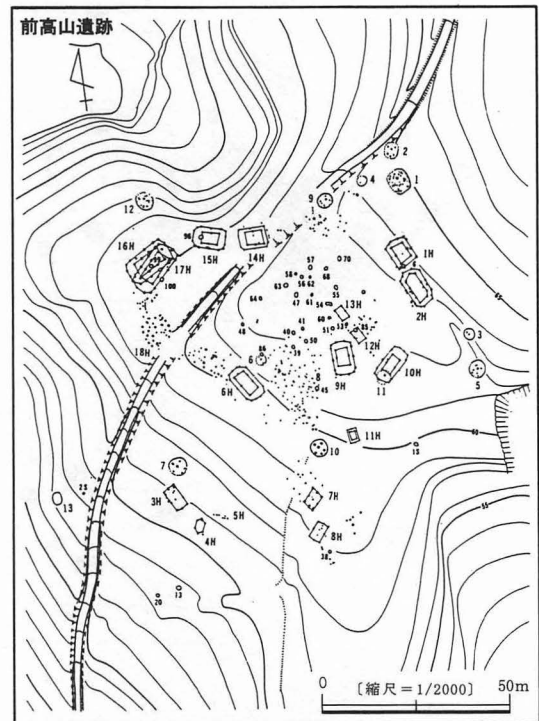
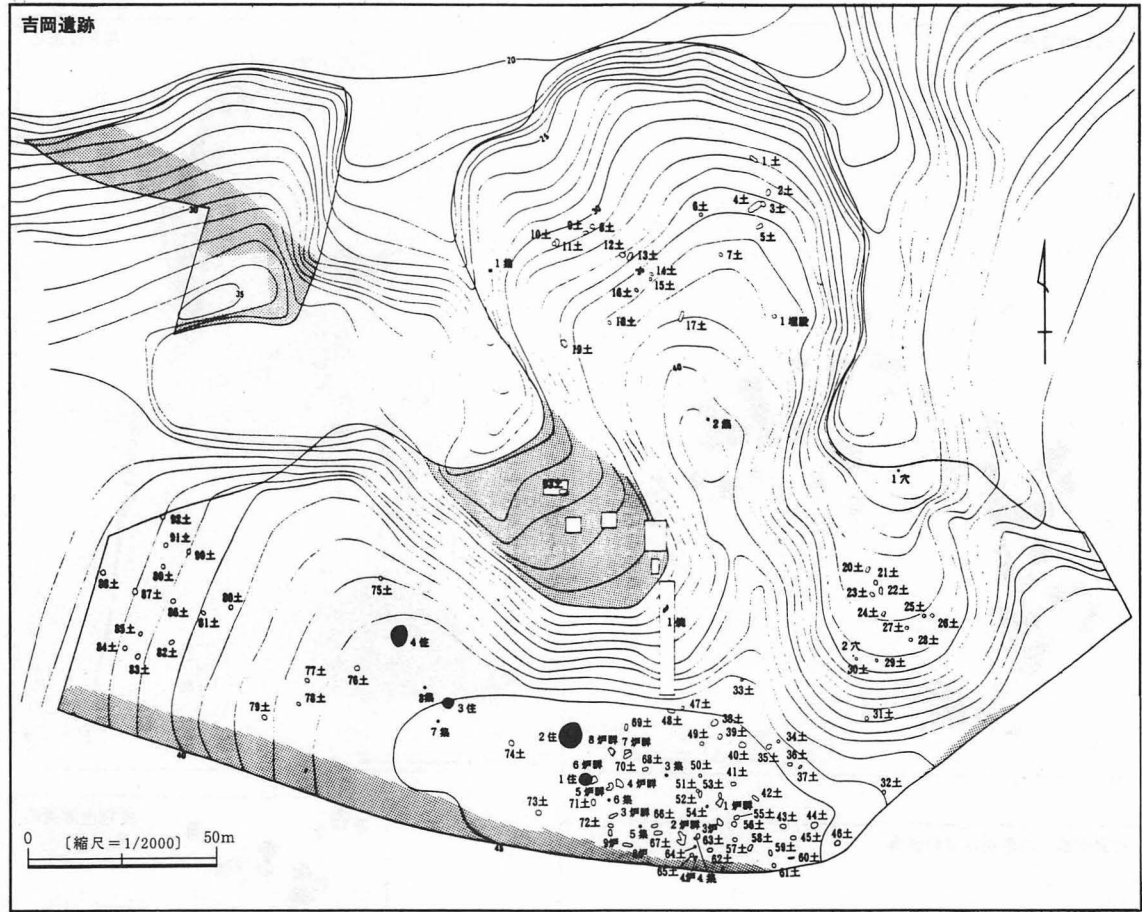
集落の規模は、下溝遺跡群や岡田遺跡のように数百mの規模を有するような大規模な集落である場合、杉久保遺跡のような数十基単位の集落である場合、吉岡遺跡のような小単位の集落である場合などがある。

勝坂式期の代表的な集落の一部を概観したが、いずれの場合も調査範囲という制約があり、遺跡の広がりを十分に捉えることが困難である場合も多い。ここで取り扱った遺跡においても、調査区に隣接する地形の検討や、近隣に所在する遺跡の様相を十分に把握して、集落の広がりを捉えていく必要がある。また、編年案の第Ⅰ期・第Ⅱ期の集落数が現時点では少ないこと、第Ⅲ期・第Ⅳ期にかけて急速に発達した勝坂式期の環状集落が、加曽利E式期まで継続して営まれていることなど、今後検討していかなければならない課題も多いといえよう。

(天野賢一)



第6図 勝坂式期の主要集落(2)



第7図 勝坂式期の主要集落(3)

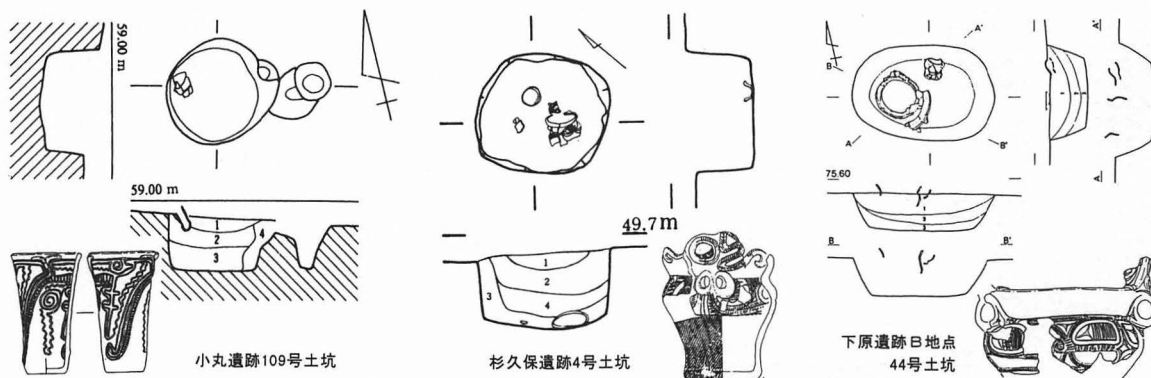
IV. 墓 制

墓制を探る直接の手がかりとなるのは埋葬人骨だが、県内における勝坂期の埋葬人骨出土例は皆無である。また、人骨の次に手がかりとなるのは、埋葬が想定される土坑であるが、遺跡から発見される大半の土坑は時期や性格を確定するのが難しく、結果的に墓として扱うことができる資料は限られたものになる。

土坑墓：墓壇と推定される土坑で、現在までに報告されているのは以下の16例である。① 甕被葬が想定される土坑(壁際の上層部や坑底から斜位に深鉢が出土する土坑)：横浜市三の丸遺跡A155号、海老名市杉久保遺跡1号(I～Ⅱ期)・同4号(V期)・同10号(Ⅳ～V期)、相模原市下原遺跡B地区44号(V期)・同50A土坑(I～Ⅱ期)。② 土器の副葬と推定される土坑(小形円筒形土器が出土した土坑)：横浜市小丸遺跡第109号(I期)・下原遺跡B地区11号(V期)・同36号土坑(V期)。③ 形態と土器片の出土から当該期の墓壇と推定される土坑：相模原市上中丸遺跡A地区25号(Ⅲ期)・下原遺跡A地区第9号・16号・18号(Ⅱ期)・同B地点19号(V～Ⅵ期)・杉久保遺跡第5号(Ⅳ～V期)・伊勢原市比々多遺跡群中坂東遺跡第27号(Ⅲ期)。なお、③のうち上中丸・中坂東例は出土土器がやや大きく、甕被葬の可能性がある。これらの土坑の形態は不整楕円形か不整円形で、規模は長径80～150(平均111cm)、短径64～135(平均89cm)、深さ25～77(平均44cm)で、概ね径1m内外の規模として把握されるものである。縄文人の平均身長が150cm前後とされることから、大半の土坑では屈葬が想定されるが、甕被葬の想定される土坑の土器が上層から坑底にかけて出土することから、座位・仰臥・側臥・俯臥など多様な葬法が採られたものと思われる。

なお、土器以外の副葬品や覆土内に大型の礫を伴う土坑で、勝坂期に特定できる例は認められなかった。
集落内における位置：前期に環状集落が成立して以来、中央広場内に墓域が形成されることが指摘されているが、県内の勝坂期の環状集落で明確に墓域形成が確認されるいわゆる「縄文モデルムラ」の例は、下原遺跡B地区・横浜市北川貝塚・寒川町岡田遺跡の3遺跡だけである。同じ環状集落でも、下原遺跡A地区や杉久保遺跡の土坑墓は、どちらかと言えば環状集落の円環部に散在しており、中央広場の墓域形成は未発達である。また、住居址が数軒の小規模集落では、例えば小丸遺跡のように住居からやや離れて土坑墓が位置している。こうしたことから、当該期の土坑墓は住居と一定の間隔を空けて配されること、これが集落中央部に限定されることによって墓域が形成されること、また、中央広場に墓域を形成しない場合もあり得ることを指摘することができる。

その他：このほか墓制との係わりが指摘される遺構として、埋設土器と大型掘立柱建物がある。埋設土器は小児埋葬、大型掘立柱建物は葬送儀礼に用いられたとする説があるが、どちらもその機能に諸説があり、ここでは墓制に関わった可能性を指摘するにとどめたい。(長岡文紀)



第8図 勝坂期の土坑墓

V. 遺 物

1. 土製品（第9図、第2表）

ここでは、前号でおこなった土器編年案（Ⅰ～Ⅵ期）に照らしながら、勝坂式期に属する住居址等の遺構から出土した土製品の概要を把握したい。なお、遺構外出土のものについては、集成・研究の進んだ土偶に限って今回の集計に加えたが、その他については、属性に乏しい上、同遺跡内に中期後半の遺構・遺物が多数出土している状況など、時期比定に確実性を欠く場合が多いため、集成の対象から外さざるを得なかった。

該期の遺構内で確認された土製品の主な種類は、土器片錘・土器片円盤・土偶・土製耳飾が掲げられる。数量的には土器片円盤が最も多く、次いで土器片錘・ミニチュア土器・土製耳飾・土偶の順となっている。

土器片錘（1～6） 五領ヶ台式期から引き続き事例が確認できる。Ⅰ・Ⅱ期に属する資料は該期の遺構数が少ないこともあり、点数は希少である。Ⅲ期以後は遺構数に比例し点数が増加している。土器片長軸方向に浅い切目を作成する形態が一般的である。該期には石錘が併存するが、今後これとの関係解明が課題である。

土器片円盤（7～12） 土器片錘同様、前時期から事例が確認できる。点数の動向も土器片錘と類似している。平面形は周囲に摩耗痕が観察される円形基調のものが大半で、時期明瞭な有孔の資料は認められない。

土偶（13～23） 前時期の集成で県内の事例は管見に触れず、該期から漸く存在が確認できる。遺構外出土ではあるが、角押文を文様施文に用いたⅠ期に比定される資料(19)が認められ、該期当初からの存在は確実であるが、これ以外Ⅰ・Ⅱ期の明確な資料は指摘できない。Ⅲ期以降は、土器文様との対比が難しく細かな時期比定ができないが、住居址覆土中でⅤ・Ⅵ期の土器とともに出土している事例が多い。遺存状態は、いずれも破損状態である。13の頭部には髪形を彷彿させる文様が施されており、15の側面観は恰も仮面を被っているかのように見える。23には赤彩の痕跡が観察される。

土製耳飾（24～32） 属性に乏しく時期比定に不安が残るが、該期の住居址出土のものを集成した。24はⅠ・Ⅱ期の土器とともに検出されたものであり、いずれかとの共伴であれば該期で最も古い事例となる。その他はⅤ・Ⅵ期の土器とともに出土している事例が多い。32以外は臼形の中央に貫通孔をもち、貫通孔方向に長い形態(29・30等)と直径方向に長い形態(24・27)が識別される。さらに前者には貫通孔が細く体部が厚手のもの(30等)と貫通孔が広く体部が薄手のもの(29等)とが観察される。25・27～29には赤彩が遺存している。

第2表 勝坂式期遺構の出土の土製品

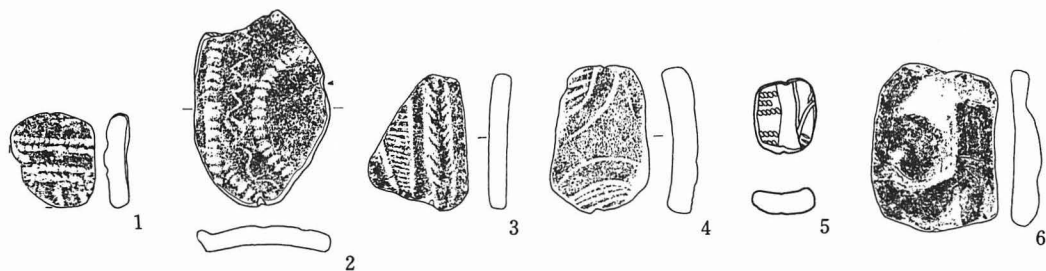
所 在 遺 跡 No.	遺 跡 名	土器片錘	土器片円盤	土 偶	土製耳飾	ミニチュア土器	検 出 No.
川崎市	85 金程向原第Ⅱ地点	2	8				1
横浜市	1 赤田地区No2	7					
横浜市	5 上白根おもて	2	16				5
横浜市	11 大口台	9	16			1	2, 6, 35
横浜市	14 井土尻				1		24
横浜市	63 原出口				1		32
横浜市	72 梶山北	10					3
横浜市	83 西之谷大谷		2				
相模原市	113 上中丸A地区			(3)	2	1	30, 31
相模原市	115 下中丸B地区		15	1(3)	1	6	21, 25, 33, 40, 41
相模原市	116 下原A地区	2	11			1	9
相模原市	117 下原B地区	3	19	2		5	12～14, 34, 37, 42
相模原市	118 新戸		6				
相模原市	119 当麻		7	1		3	11, 17
相模原市	172 橋本			(1)			
海老名市	141 杉久保	1	71				
寒川町	147 岡田			(1)			
藤沢市	107 湘南藤沢キャンパス内	2	3		1	1	29
藤沢市	108 西部221地点	1					
城山町	151 川尻		20	3	2	2	8, 20～22, 26, 27, 38, 39
津久井町	152 大地開戸		16		1		28
津久井町	153 三ヶ木		20	1		2	7, 18, 19, 36
山北町	149 尾崎		2	1		1	43
伊勢原市	135 神成松	1	7				4, 10
秦野市	171 天神台			(1)			
平塚市	163 原口(未報告)			(4)			15, 16
合 計		40	239	9(13)	9	23	

※括弧内数値は他時期遺構内または遺構外出土

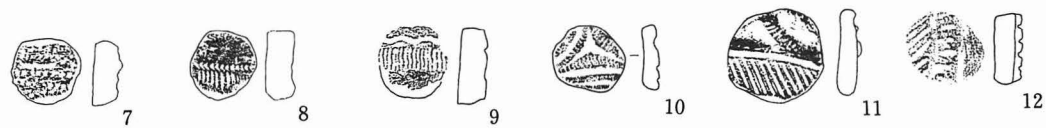
ミニチュア土器(33～43)

属性に乏しく帰属時期に不安が残るが、該期住居址出土の器高10cm以下の資料を集成した。手捏ね製が多く、形態はバラエティーに富むが、無文が多い。Ⅴ・Ⅵ期の土器と共に出土している事例が多く、40にはⅢ・Ⅳ期的な、43には赤彩に加えⅤ・Ⅵ期的な文様がみられる。（恩田 勇）

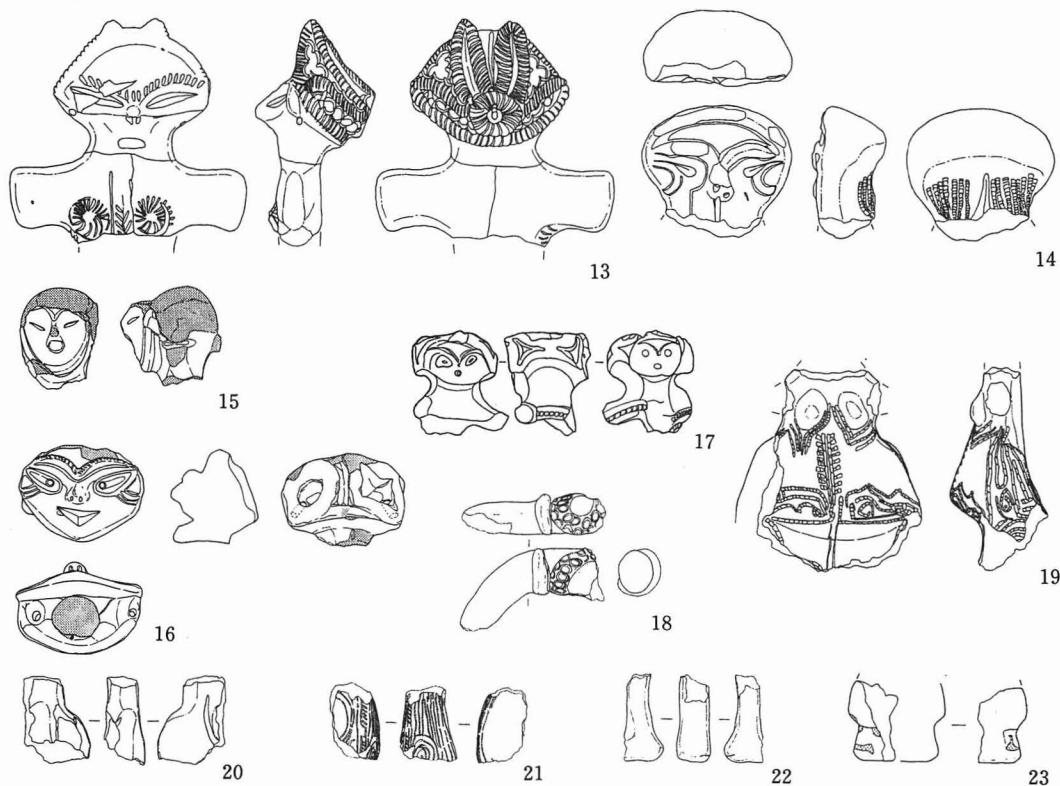
土器片錘



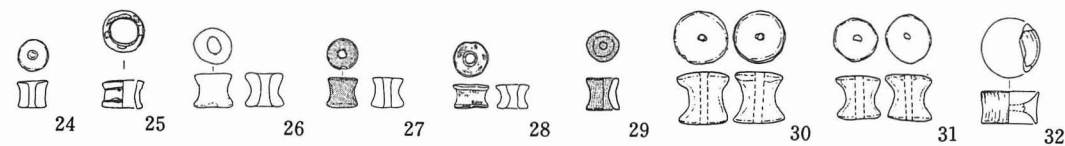
土器片円盤



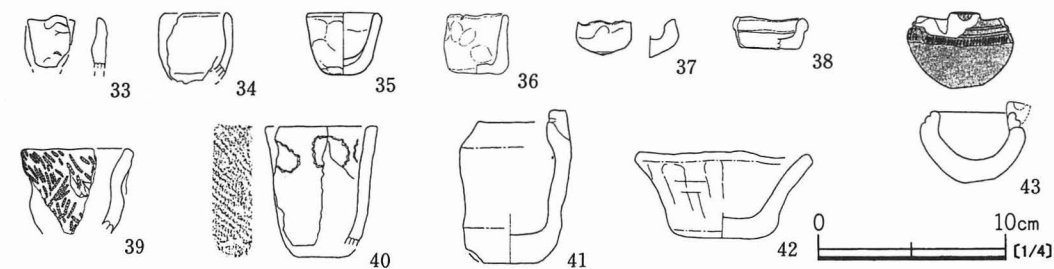
土偶



土製耳飾



ミニチュア土器



第9図 勝坂式期の土製品

2. 石器・石製品(第10図)

ここでは、勝坂期全体の石器について、主に住居址等の遺構から出土したものを抽出し、大まかな器種毎の概略に触れてみる。なお当該期の石器類の出土量等についての数値的な検討は、報告資料が膨大なためと各資料の掲載内容にばらつきが認められたため、割愛させていただいた。ただし、石器の全体量の傾向のみ触れておくと、住居の軒数の増加がみられる勝坂Ⅲ期以降の出土量は激増している。

石鏃(1～7) 遺構外に持ち出されて使用されるため、完形品は多くなく、未製品や欠損品が目につく。凹基無茎鏃が主流をなし、長さは正三角形に近いものから、二等片三角形のものまで多様である。1・2は平茎のもの。

石錘(8～11) 扁平な楕円礫の長軸・短軸の両端に浅い切れ目を入れている。双方に入れるものもある。溝状に加工したものは管見に触れなかった。西部221地点遺跡などで比較的多く出土している。

浮子(12) 軽石製の浮子である。製品としての出土例は多くない。周囲を整形したものと自然面を残したものなどがある。12は周囲を四角く整形し穿孔している。

敲石・磨石・凹石(13～19) 敲石は、敲打された面が扁平で面的に細かい敲打痕が認められるもの、端部を利用し敲打面が部分的で剥離痕が認められるものなどが比較的多く認められている(13～15)。凹石は礫の平坦面のほぼ中央に1箇所ないし複数箇所の凹部をもつもの(18)、磨石は敲石や凹石と併用して使われたものが多く、磨石のみとして使われたものは少ないようである。扁平・長楕円形礫の平坦面や側縁など多面を利用しているものが目立つ。

石皿・台石・多孔石(20～21) 石皿は摺り面が凹状に作出されるもの、大型礫の平坦面をそのまま利用したものなどが見られる。凹部は緩やかな局面をもつものが多く、また台石や多孔石との兼用も見られる。

打製石斧(22～31) 器種としての出土数は相対的に多い。短冊形・撥形がそのなかでも多くを占めるが中間的な形態のものもある。明瞭に中央に挟りをもち両端が広がる分銅形(31)は多く認められなかった。欠損したものを再加工して使用したようなものもあり、大きさは多様である。25・31のような大型の打製石斧も多くはないが認められる。このほか杉久保遺跡では三日月状の打製石斧なども出土している。

磨製石斧(32～37) 乳棒状を呈するものが主体である。敲打痕を残すものなど未製品や欠損品の出土が多い。ほかに刃のみを磨いている部分磨製石斧(37)がある。36は刃部両端を定角的に加工した痕跡がみられるとされている。

大型粗製石匙(38～41) 形態は石匙に類似するが、大型で粗製のもの。量的には打製石斧や磨石・敲石類に劣るが、当該期にはよくみられる。ホルンフェルスが石材として多用される。摘み部分をもち、刃部が横形、あるいは斜めのものと縦形のものとがあるが前者が圧倒的に多い。

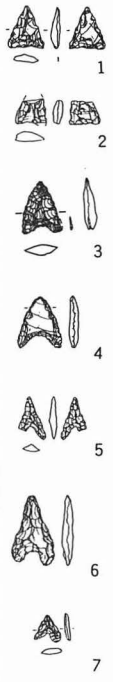
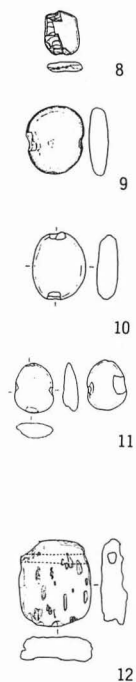
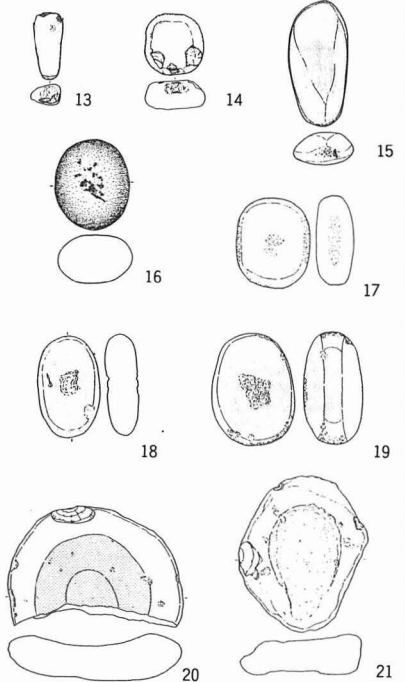
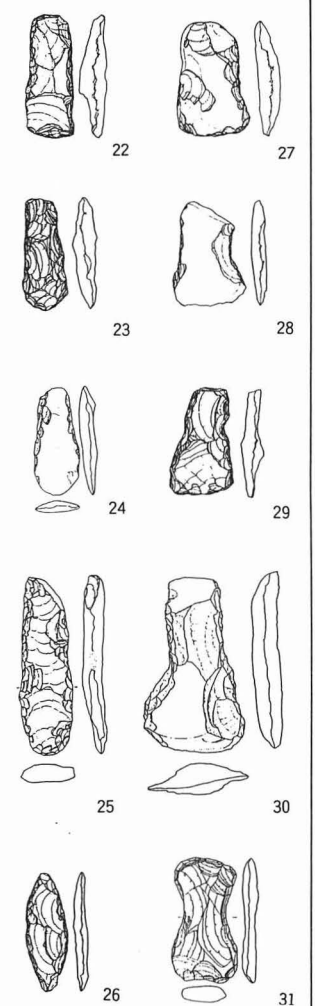
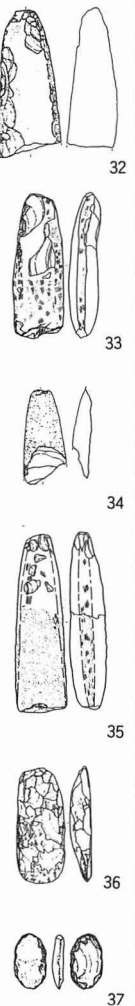
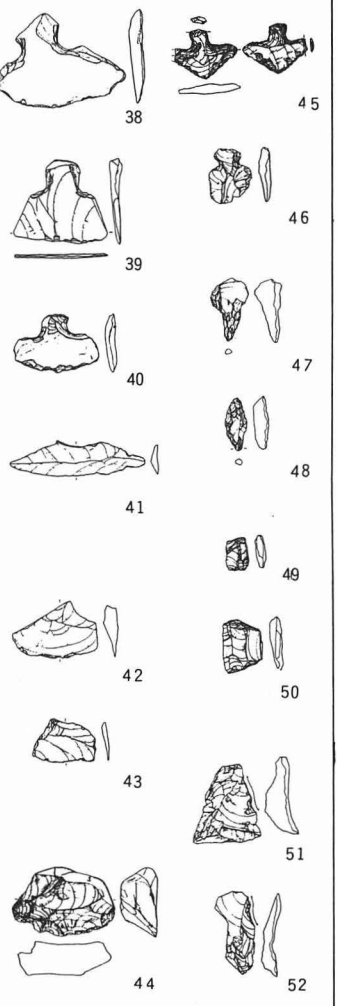
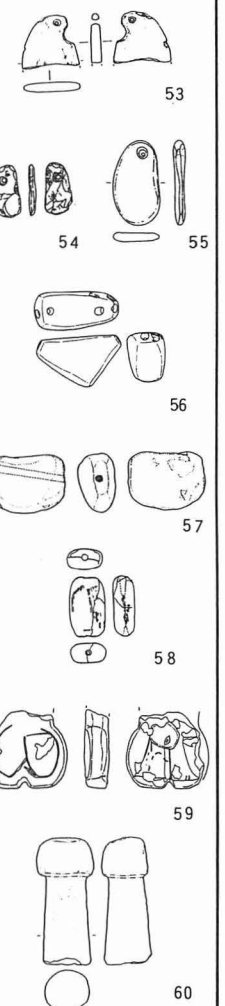
横刃形石器(42～43) 鋭いエッジをもつ剥片の1辺ないし2辺を刃部としているもの。

石錐(47～48) 摘み状の部分をもち尖頭部を棒状に作出したもの、棒状に作出したもの、剥片の端部にノッチ状の加工を加えて先端部を作出したものなどがある。

礫器(44) 自然礫の側面などに刃部を作出してあるもので、片刃のものと両刃のものがある。

石匙(45・46) 小型で精製された作りのもの。出土は多くないようである。45はチャート製であるが比較的大型で特異な例である。粗製ではないという意味で小型石匙の範疇にはいるものとした。

その他の加工具では、楔形石器(49・50)、スクレイパー(51・52)などが出土している。(加藤千恵子)

狩猟具	漁労具	植物加工具	土掘り具	伐採具	加工具	石製品
石鏃	石錘・浮子	敲石・磨石・凹石・石皿類	打製石斧	磨製石斧	石匙・横刃形石器・礫器・石錐他	
						
<p>三ヶ木1住：8・15・17・18・22・27・32・34・37・40～43・49～52、三ヶ木2住：23・26・38、 三ヶ木5住：6・47・48、三ヶ木7住：21、三ヶ木12土坑：46、 川尻2住：24・28・29・31・56、川尻3住：7、 湘南藤沢キⅡ区1住：25、湘南藤沢キⅡ区2住：11、湘南藤沢キⅡ区3住：10、 下原A1住：55・59、下原B2住：30、下原B3住：54、下原B9住：60、 上白根おもて28住：57、当麻48住：39、下中丸B4住：58、平台北住：1・16、 細田6住：2・5、吉岡A区4住：3・44・45、大地開戸30住：4・19・20、杉久保38住：12、 神成松1住：13・14・33・35・36、小丸28住：53、石川山田C1住：9</p> <p>スケール：下記のもの以外は1／8 1／18：20・21・60 1／5：1～7・53～56 1／6：59</p>						

第10図 勝坂式期の石器・石製品

石製品(53～60) 勝坂式期の石製品としては、小丸遺跡28号住居址出土の垂飾(53)、川尻遺跡J 2号住居址出土の垂飾(56)、下原遺跡B地区第4号住居址出土の垂飾未製品(58)、同遺跡第20号住居址出土の垂飾、第35号住居址出土の垂飾(54)、第9号住居址出土の石棒2点(60)、上白根おもて遺跡第28号住居址出土の垂飾(57)等があげられる。また、下原遺跡第19号住居址出土の岩偶(59)、上白根おもて遺跡第41号住居址出土の岩偶様の石製品の存在が特筆される。これらの事例はそのすべてが編年案のⅢ～Ⅴ期に相当する。Ⅰ～Ⅱ期に属すると同定し得る事例は皆無で、勝坂式期前半段階における石製品の様相は不明である。垂飾は厚手のいわゆる大珠とされるものが見られる。石棒はその多くが遺構外からの出土で、厳密に当該期に所属することが明らかな事例は炉石に転用されていた上述の2例のみにとどまった。石棒の使用の場が主として屋外にあったとすれば、本来当該期に所属していた事例の多くを見落としている可能性は高い。大珠、石棒、岩偶の事例は前段階までには見あたらず、石製品は当該期をもって、五領ヶ台式期まで続いた块状耳飾り等の前期的様相を払拭し、中期的な様相を確立したものといえよう。(小川岳人)

神奈川県内 中期中葉土器出土主要遺跡地名表(補遺2)

- (1) この表は一昨年度および昨年度刊行した「神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅴ ―中期中葉期 勝坂式土器文化期の様相 その1」 「同 その2」(1998・99 研究紀要3・4)に掲載できなかった遺跡を補うものである。
(2) 掲載基準および様式は前回は踏襲している。
(3) 作成に当たってはプロジェクトメンバーが分担して集成し、データベース化した。なお、表の編集は長岡が担当した。

遺跡No	遺跡名	所在地	住居数	阿玉台	文献No
横浜市青葉区					
170	上恩田遺跡群 杉山神社遺跡	恩田町字内田前 912番地外	28		112
秦野市					
171	天神台遺跡	北矢名			113
相模原市					
172	橋本遺跡	元橋本町橋本7			114
厚木市					
173	中荻野成井田遺跡	中荻野成井田・本郷			117

遺跡No	遺跡名	所在地	住居数	阿玉台	文献No
伊勢原市					
174	神戸・上宿遺跡	神戸字両毛703-5他			122
175	咳止橋遺跡	粕谷字咳止橋外	1		118
中井町					
176	境大塚遺跡	境字大塚218外			119
津久井郡					
177	県営三ヶ木団地遺跡	三ヶ木633他	1		121

文献一覧(表中文献Noと一致)

112 1985 大川清ほか 『上恩田遺跡群杉山神社遺跡の調査』 第9回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨 第9回神奈川県遺跡調査・研究発表会準備委員会
113 1985 杉山博久ほか 『秦野市史 別巻 考古編』 秦野市
114 1985 大貫英明ほか 『橋本遺跡 縄文時代編』 相模原市橋本遺跡調査会
115 1995 坂本彰ほか 『花見山遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 XVI (財)横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター (遺跡番号62の本報告)
116 1996 竹石健二・野中和夫 『金程向原遺跡Ⅲ 一第Ⅲ地点(遺物編)発掘調査報告一』 金程向原遺跡発掘調査団 (遺跡番号85の遺物編報告)
117 1998 北川吉明 『中荻野成井田遺跡』 神奈川県厚木市一般国道412号厚木・上荻野バイパス事業に伴う発掘調査報告書(VⅢ) 国道412号線遺跡発掘調査団
118 1998 高杉博章 『神奈川県伊勢原市 咳止橋遺跡 県道63号(相模原大磯線)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』 伊勢原市Na128遺跡調査団
119 1998 高杉博章 『神奈川県中井町 境大塚遺跡 県立やまゆり園再整備に伴う埋蔵文化財発掘調査』 中井町境大塚遺跡調査団
120 1999 石井寛 『小丸遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 25 (財)横浜市ふるさと歴史財団/横浜市教育委員会 (遺跡番号47の本報告)
121 1999 北平朗久・吉田浩明・麻生順司 『神奈川県津久井町 県営三ヶ木団地内遺跡発掘調査報告書』 県営三ヶ木団地内遺跡発掘調査団
122 1999 木村吉行・柏木善治 『神戸・上宿遺跡(Na15)―第一東海自動車道厚木・大井松田間改築事業に伴う調査報告 15 伊勢原市内一』 かながわ考古学財団調査報告 57 (財)かながわ考古学財団
123 1999 吉田浩明・中山豊 『神奈川県城山町 川尻遺跡(城山町Na1遺跡)発掘調査報告書』 城山町Na1遺跡発掘調査団 (遺跡番号151に関わる調査報告)